

博士学位論文審査要旨

2019年6月25日

論文題目： 日本における高齢者に対するエイジズムの変遷
—映画にみられるステレオタイプの分析から—

学位申請者： 朴 蕙彬

審査委員：

主査： 社会学研究科 教授 埋橋 孝文

副査： 社会学研究科 教授 山田 裕子

副査： 同志社女子大学現代社会学部 教授 日下 菜穂子

要 旨：

エイジズムは「老化が人々をより非魅力的で、より非性的で、より非生産的にするという信念に基づいた、高齢者に対する偏見と差別」であるといわれる (Wilkinson & Ferraro, 2004)。年齢意識や社会文化的特徴から作り上げられたステレオタイプは個人の特性や個性を見過ごす可能性をもつ。

本論文は、高齢者ステレオタイプの特徴を明らかにすることで、日本におけるエイジズムの特性を浮き彫りにしようとする「実証的基礎研究」である。

第1章では、これまで日本においてミクロレベルのエイジズム意識・知識の調査・分析以外の研究が乏しい点、「社会の高齢者観研究の必要性」が指摘される。

第2章では、ステレオタイプがいかなる役割、特徴をもっているかについて、また、ステレオタイプ研究にあたっての素材選定や研究方法について論じている。

ステレオタイプは認知的プロセスであり、人々を集団の成員として扱うことで脳の働きのエネルギーを節約するという機能がある一方で、個々人の特性ではなく集団としてきめつけてしまう傾向がある。

本論文では、ステレオタイプ研究の素材として映画を取り上げている。その理由は第1に、映画は社会と文化から影響を受け、他方でその社会や文化に影響を及ぼす（「文化的貯水池」としての映画）、第2に、映画は音声、映像を限られた時間の中で濃密に描いており、研究素材として取り扱いやすいことである。

分析の視点としては、非言語的側面と言語的側面の2つの側面から分析している。言語的側面では、高齢者世代のセリフと他の世代が高齢者を表現するときのセリフを比較分析し、また、ステレオタイプの中でも「持続的なステレオタイプ」と「変化がみられるステレオタイプ」、「ジェンダー別の違い」について検討している。

第3章では、興行収入5位以上の映画42作品を対象に、第4章では、高齢者が主役の映画39作品を対象に高齢者ステレオタイプ分析をおこなっている。第5章では、『東京物語』（1953）と『東京家族』（2013）の比較分析をおこない、60年間の変化を追っている。第6章では、それぞれの章から得られた「持続的なステレオタイプ」と「変化がみられるステレオタイプ」についての総合的な考察にあてている。

上のような映画分析から、代表的な高齢者ステレオタイプとして「持続的にみられるもの」には、「高齢者は他人を助ける存在である」が挙げられている。つまり、高齢者が他人を助けること

を理想とする高齢者ステレオタイプである。一方、「時代の変化がみられるもの」には「高齢者の活動・生活にかかわりのある場面や人間関係が家庭内から家庭外へ拡大」したことが挙げられている。つまり、生活や活動、人間関係の広がりや観察されるのである。ジェンダーによる違いとして、「男性はアドバイスをするが自分の状況を嘆く」、その一方で「女性は感情的な共感する余裕のある存在」であることを見出している。映画『東京物語』と『東京家族』は制作年度に60年の時間差があるが、この2つの映画の分析から高齢者ステレオタイプの特徴を再確認している。

「持続的なステレオタイプ」は一種の「決めつけ」として作用する可能性が高く、その結果、高齢者の生活や活動の範囲を狭めることがありえる。また、そのステレオタイプから外れる高齢者はバッシングを受けることも考えられる。その一方で、「変化するステレオタイプ」は、高齢者像の幅を広げるという側面があり、この点では肯定的に評価できる。しかし、そのみが一方的に強調されてしまうと、たとえばいつまでも元気な高齢者像が求められることになり、病弱な高齢者には逆のバッシングが差し向けられることが考えられ、こうした点が懸念される。

本研究の意義は以下の3点である。

第1に、本研究は、既存研究によって今後の課題として指摘されてきた日本の社会文化における高齢者ステレオタイプを明らかにした。そのことによって、エイジズム研究の素材範囲を「個人」から広く「社会文化」へ広げたことである。

第2に、本研究は、特定時点の分析ではなく47年間という長期にわたるデータを分析した。そのことによって、特定時期の分析という「点の研究」から、継続する長期の分析という「線の研究」が可能になったことである。

第3に、本研究は、エイジズムが固定されたものでありながらも、その出発点であるステレオタイプには、時代の変化に伴う変遷があることを確認した。そのことによって、ステレオタイプひいてはエイジズムが変化していくものであり、克服できる概念であるという可能性を提示したことである。

本論文が日本の大衆社会文化にみられる高齢者のステレオタイプを明確に提示しえたことは、今後のエイジズム研究の発展に重要な基礎的資料を実証的に提供するものであり、エイジズム研究に大きく貢献し、長く参照されるに違いない本格的研究となっている。

よって、本論文は、博士（社会福祉学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2019年6月25日

論文題目： 日本における高齢者に対するエイジズムの変遷
—映画にみられるステレオタイプの分析から—

学位申請者： 朴 蕙彬

審査委員：

主査： 社会学研究科 教授 埋橋 孝文

副査： 社会学研究科 教授 山田 裕子

副査： 同志社女子大学現代社会学部 教授 日下 菜穂子

要 旨：

2019年6月25日（火）18時から1時間40分にわたり、申請者による公開学術講演会を溪水館1階会議室においておこなった。引き続き、20時から約1時間にわたり、上記3名の主査・副査による口頭試問をおこなった。

公開学術講演会において申請者は博士学位申請論文に関する講演をおこない、エイジズムの構成要素である「持続的なステレオタイプ」と「変化がみられるステレオタイプ」、「ジェンダーによる違い」を実証的に明らかにした。そのうえで、ステレオタイプも変化しつつあること、高齢者を肯定的に描くステレオタイプが出現していることとその捉え方を明確に指し示した。こうしたオリジナリティに富む分析は、エイジズム全体の理解にとっても大いに参考になる点である。二人の副査および講演会出席者からの質問に対しても的確に回答した。

また口頭試問において、審査委員からの学位申請論文内容と社会福祉学に関する質疑に対して的確に回答し、豊かな知識、学力を有していることを証明した。同日（21時～21時50分）に実施した語学試験（英語）においても、十分な学力を有していることが確認された。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 日本における高齢者に対するエイジズムの変遷
—映画にみられるステレオタイプの分析から—
氏名： 朴 蕙彬

要旨：

エイジズムは年齢を基準に認識し、評価し、行動する態度である。また、高齢者が自分らしい人生を送ることを妨げ QOL の低下にも影響を与えるものであり、高齢者を人生の主体ではなく客体として捉えた社会や他者の見方でもある。なかでも認識であるステレオタイプは高齢者や若いへの考え方として、エイジズムの出発点ともいえる。ステレオタイプは物事を認識して判断する際に、重要な手がかりを提供する一方で、集団の特徴によって個人を判断してしまう決めつけとして機能する。

本研究の目的は、高齢者の多様性が尊重される豊かな高齢社会の実現を目指し、日本の社会文化における高齢者についての認識の分析からエイジズムの特徴を明らかにすることである。そのために、エイジズムを構成する概念の一つである高齢者ステレオタイプとその変遷に注目する。また、高齢者のステレオタイプを明らかにするために、社会文化が反映され、社会文化に影響を与える素材として映画を研究素材とする。映画は実社会から影響され影響を及ぼすために、特定対象のイメージ形成および大衆の認識と関連性が高いため、ステレオタイプ分析に適した素材である。

これらのことを踏まえて、本研究は以下のような研究課題を設定した。

1. エイジズム構成要素を軸に先行研究を批判的にレビューする。
2. 社会文化における高齢者ステレオタイプ研究の素材および分析法を提示する。
3. 高齢者ステレオタイプが永続的なものなのかを明らかにする。
4. 高齢者ステレオタイプにみられる時代の変化があるのかを確かめる。
5. ジェンダーによる違いはあるのかを確認する。
6. 映画分析から得られた高齢者ステレオタイプを分析対象外の映画で再確認する。
7. 高齢者ステレオタイプの類型化からエイジズムの特徴を明らかにする。

研究課題 1, 2 は理論的な検討、研究課題 3~6 は映画分析という実証、研究課題 7 は分析結果の考察である。

まず、研究課題 1 については、これまで日本でエイジズムがいかに研究され、その成果と到達点、残された研究課題にはどのようなものがあるのかを先行研究レビューから明らかにした。日本のエイジズム研究の到達点として、多様な個人がもつエイジズム意識に関する基礎データが蓄積されていることがわかった。しかし、個人のエイジズム意識・知識の調査・分析研究以外の方法による研究が乏しい点、研究課題として指摘されている「社会の高齢者観研究」「メディアによる高齢者の取り上げ方の見直し」の研究が行われてこなかったことが不十分な点である。これらの先行研究レビューから、エイジズム研究において社会文化における高齢者像の分析が重要な研究課題であることが明らかにされた。

研究課題 2 に関しては、ステレオタイプの機能について整理し、高齢者ステレオタイプ分析の

ための素材選定や研究方法を先行研究から援用し、提示した。前述のように、ステレオタイプは認知的プロセスであり、人々を集団の成員として扱うことで脳の働きのエネルギー節約という機能がある一方で、個々人の特性ではなく集団として決めつけてしまう特徴がある。つまり、ステレオタイプは高齢者の個別性を尊重せず集団として高齢者がもつ一部の特徴やイメージを固着化してしまう恐れがあると同時に、エイジズムの出発点なのである。

本研究でステレオタイプ分析の研究素材として映画を取り上げる理由は、第一に、映画が社会と文化から影響を受け、他方でその社会や文化に影響を及ぼすため、第二に、映画の国籍、年齢、性別などを越えた影響力と映画の普及方法が多様になったことによる接近性が向上したため、第三に、ステレオタイプ研究において映画は研究素材として取り扱いやすく、音声・映像のデータが同時に得られるためである。

映画の分析視点については、既存の映画を素材にしたステレオタイプ研究をレビューし、次の5つの分析視点を得ることができた。①ステレオタイプの時代による変遷の確認、②言語的側面と非言語的側面からの分析、③ジェンダーによる違いの確認、④分析結果を量的データとして活用、⑤ステレオタイプの類型化からエイジズムの特徴分析である。

これらのことをふまえて、研究課題3～6については、高齢化社会（人口高齢化7%）以降の日本で上映された実写映画のなかの高齢者ステレオタイプを分析した。具体的には、多くの人から人気を得た興行収入上位の映画42作品、高齢者が主役の映画39作品を分析した。さらに、高齢者とその家族がメインテーマの映画『東京物語』（1953）とそのリメイク作である映画『東京家族』（2013）を比較分析することで、興行収入上位の映画および高齢者が主役の映画分析から得られた高齢者ステレオタイプがより長い時間の差がある映画においてもあらわれるものなのかを再確認した。

上記に述べた映画を分析した結果、興行収入上位の映画では、高齢者はすべてわき役であり、主人公の家族として登場することが多くみられた。また、高齢者は感情的な行動をする存在として登場しており、老いや高齢者をめぐる否定的な言語表現が多いことが確認された。そのほかには、高齢者の登場する場面が家庭内から家庭外へ移ってきたこと、男性は長老のような役割、女性は感情の共感や悠々自適とした生活をする存在として表現されていることがわかった。

また、高齢者が主役の映画は、高齢者は他人にやさしく接し助ける存在、死に近い存在として表現されていること、高齢者は認知症になるという決めつけが確認できた。また、他の世代は老いについて否定的なことを語る一方で、高齢者自身は否定的なことを語りつつもエイジズムへの反証ともいえる新たな発見についても語っている違いがみられた。ジェンダーによる違いについては、男性は新しいことの企画・行動をするが、自分の生活状況についてはなげく一方で、女性は認知症患者として登場する人物数が男性の倍以上多くみられた。

これらの興行収入上位の映画および高齢者が主役の映画分析から、代表的な高齢者ステレオタイプとして、持続的にみられるものには「高齢者は他人を助ける存在である」を、時代の変化がみられるものには「高齢者の活動・生活にかかわりのある場面や人間関係が家庭内から家庭外へ拡大」を取り上げる。また、ジェンダーによる違いにおいては「男性はアドバイスをするが自分の状況を嘆く一方で女性は感情的な共感する余裕のある存在」を取り上げて、60年の時間差がある映画『東京物語』と『東京家族』においてもこれら的高齢者ステレオタイプがみられることを再確認した。

上記の計83作品の映画分析から得られた高齢者ステレオタイプを研究課題7に掲げたように、類型化を行った。その結果、第一に、限定的な高齢者の人間関係、第二に、自立・支援するように求められる高齢者、第三に、病弱な高齢者、第四に、人間的欲求を超越した存在として的高齢者、第五に、否定的に捉えられる老いという5つの高齢者ステレオタイプが得られた。分析結果

の高齢者ステレオタイプは持続的にみられる一方で変化も確認することができた。

持続的に確認できるステレオタイプは決めつけとして作用し、高齢者の生活や活動の範囲を狭めることになりかねない。また、そのステレオタイプから外れる高齢者はバッシングを受けるようなことが生じることも考えられる。一方で、変化するステレオタイプは、狭い意味で高齢者像の幅を広げるといった側面があり、肯定的に評価できる。しかし、そのみが強調されてしまうといつまでも元気な高齢者を求めることになってしまい、病弱な高齢者には逆のバッシングが向けられることが懸念される。

最後に、映画分析を通して得られた高齢者ステレオタイプとその類型化から、日本のエイジズムの特徴は下記3点にまとめることができる。

第一に、老いが否定的に捉えられており、中でも男性のみに向けられるエイジズムが確認された。老いを否定的にとらえる典型的なエイジズムが確認されるなかで、従来のエイジズム研究ではあまり注目されてこなかった男性高齢者の性格特徴（がんこ）に関するステレオタイプが確認された。このことは、葛藤や問題の原因を高齢者に求めるようなものとして作用することが考えられる。

第二に、高齢者は身体的な限界を超越した存在としてとらえられていることである。高齢者の弱さに注目する一方で、彼らの自立と支援を求めるといった矛盾したものが存在する。さらに、人間の欲求を超越した存在であることが理想であるとされている。

第三に、高齢者は慣れ親しんだものを好み、人間関係の範囲が狭いことである。高齢者の人間関係は長い付き合いのある人物や家族を中心としたものとするのは、高齢者の社会活動の範囲を狭く捉えているものである。さらに、新しい人間関係においては葛藤が生じることから、高齢者は新しいことよりは慣れ親しんだものを好むという決めつけが確認できた。

本研究の意義は以下の3点である。第一に、本研究は既存研究の課題として指摘されてきた社会文化における高齢者ステレオタイプを明らかにしたことによって、エイジズム研究の素材範囲を個人から社会文化へ広げたことである。第二に、特定時点の分析ではなく長期間のデータを分析したことによって、個別時期の分析という意味の「点の研究」から、継続する長期間の分析という意味の「線の研究」を可能にさせたことである。第三に、エイジズムが固定されたものでありながらも時代変化に伴う変遷があることが確認でき、エイジズムは変化して克服できる概念であるという可能性を提示したことである。